

流れを読む

消えた「平等」

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

一九九〇年を挟んでベルリンの壁とソヴィエト連邦が崩壊し、「冷戦」は終わった。九〇年代の過渡期を経て明確となってきた「二十一世紀の流れ」は、グローバリズムの急展開とアメリカの一極超大国化、帝国化である。ソヴィエトを中心とする共産主義国家とのイデオロギー戦争では、アメリカ・西欧側は自由主義、資本主義の擁護であった。そして勝った。それはフランス革命以来の「自由・平等・博愛」の再現かと考えられたが、そうではない。アフガニスタンやイラクでの戦争で勝ったアメリカが、さらに押し進めようとしている「普遍主義」は「自由、民主主義、市場経済」である。その中には「平等」が無くなっている。市場経済化を進めていけば競争が激しくなり、勝者と敗者が明確となつて国内でも海外でも所得の不等化が一層進む。アメリカの貧富格差は八〇年代以降激しくなり、貧困層の所得が純減する一方、最富裕層のシェアが上昇して「中流の消えたアメリカ」となった。国際的影響は極めて深刻である。第一はイスラム原理主義化とテロ拡散の危機である。アメリカはイスラム教との戦いではないと主張している。しかし問題の根は極めて深い。ア

ラビアから中東にかけて人口が急増している。この地域は、工業先進国に比べて「多産、多死」で自給自足経済がそれなりに成り立っていた。アメリカのせいではないが、医療、保健の進歩で死亡率が低下し、人口急増を招いて自給自足経済を破壊する。その上にグローバリゼーションで市場経済化し、貧富差をさらに拡大していく。現実の格差を精神的に克服していくためには、信仰心を強めていく以外はない。アッラーの神の前では、「みんな平等」だ。第二は不平等が繁栄をもたらしているという「歴史のアイロニー」が恐ろしい力で迫ってくる。中国の繁栄は広東省珠江デルタから始まったが、この世界の半導体のチップ生産集積地の労働力を支えているのは、差別法とも言つべき「戸籍法」である。半導体工場の最適労働力は眼の良い若い十代の女性であるが、彼女たちは三年くらいで帰郷しなければならぬ。彼女等の月給は農村の父親の年収にも匹敵し、三年間で両親に立派な家を作つてやれるだけの貯金が出るので喜んで帰って行く。こうして若い女性労働力は無限に供給される。もう一つの例はインドのソフトウェア技術者である。インド政府は七つの

IIT（インド工科大学）を設立したが、その入学競争率は約五十倍である。その難関を突破したエリートのは、普通の人のほぼ十倍である。これがグローバリゼーションという妖怪の正体である。そして第三次産業革命とも言つべきIIT（情報通信技術）を中心とした技術革新は、この傾向を強力に推進している。

日本は第二次世界大戦で挫折し、文字通り瓦礫の中からの復興となった。しかし歴史の女神は日本に微笑んだ。冷戦の勃発と二十世紀後半の成熟工業社会の開花である。敗戦時、日本の国民総生産はアメリカの二十分の一（五％）であった。それから四十年にして十倍の五％を超えて、一人当りではアメリカを抜いて「JAPAN'S NO.1」となった。達成できた大きな要因は言語、宗教、価値観が同一で、効率化、大量生産に最も適した国であった。同時に「平等化」が強力に推進され、高度経済成長の好循環を生み、先進工業国中随一の平等国家を創り上げた。しかし歴史の流れは変わった。平等化は依存心を強め、個人主義的となり、真摯な向上心と、他人を思いやる共同体精神を退化させた。問われているのは不況やデフレだけではない。